

スウェーデン発の最先端認知症ケアを日本の介護に活かす

株式会社 舞浜倶楽部

総支配人 **グスタフ・ストランデル**さん

重度の認知症や医療依存度の高い高齢者も積極的に受け入れることで注目されている有料老人ホームが、千葉県浦安市にある。福祉先進国スウェーデンのケア理念と手法を取り入れたユニークな介護サービスを提供している「舞浜倶楽部・新浦安フォーラム」を訪ね、スウェーデン式ケアとはどんなものなのか、そして日本の介護への提言などを総支配人のグスタフ・ストランデルさんに聞いた。



高齢化社会の先輩国、スウェーデン

たったふたつの施設しか持たない舞浜倶楽部が、全国の介護関係者から注目を集めている理由。それは総支配人が外国人であるからでも、クラシックな洋館風の堂々とした建物であるからでもない。認知症ケアの先進国であるスウェーデンの介護ケアを導入し、入居者・利用者に快適な暮らしを実現させているからだ。

そもそもスウェーデン方式とは、どんなものなのか。

「スウェーデンは100年以上も前から高齢化社会を迎え、人格を尊重する福祉理念に基づいた高齢者や家族の方へのケアの取組みを、他の国より早くから進めていたのです。」

スウェーデン式のケアは、理念も素晴らしいのですが、技法がすべて具体的で、だれにでも取り入れることができます。」

流暢な日本語といっぱいの笑顔で話しはじめるグスタフさん。しかし、日本にスウェーデン式の介護ケアを導入するまでには、長い道のりがあった。

250以上の日本の介護現場を調査

グスタフさんが日本に関心を持ったのは剣道がきっかけだった。中学生の時に近くの道場に通り始め、高校では第3外国語に日本語を選択する。剣道をより深

く学ぶために17歳で交換留学生として早稲田大学高等学院へ。ここではじめて日本の介護と出会い、改めて自分の国が福祉先進国であることを知る。

いったん帰国してストックホルム大学で福祉を学び、2年後に再び日本の大学に留学。スウェーデンの介護を日本に紹介した先駆者、京都大学の外山義教授に師事して、全国の介護現場を調査して回る。

「日本のケアの現場を知った上でスウェーデンのいいものを紹介しないといけないので、現場の経営者やスタッフ、入居者・利用者など、たくさんのひとと話をしました。250カ所以上の介護施設で現場体験したり調査をした外国人はたぶん私のはじめてでしょうね。」

その体験を元に、28歳で「スウェーデン福祉研究所」を設立。認知症緩和ケ

アの世界的権威となった「シルビアホーム」での手法なども取り入れて、スウェーデン式ケアを日本に紹介する仕事に全力で取り組んだ。

「剣道の精神を語る言葉に『気剣体一』というのがあります。心と体と剣の動きが一致して初めて有効適切な打突ができる。

思い悩まず物事にぶつかっていく。そんな挑戦心は多くの日本のビジネスマンが持っている大きな武器です。私も剣道からそんなチャレンジングな精神を学び、介護の世界に活かすことができましたね。」

認知症でも楽しく生きることはできる

スウェーデン式ケアの普及・啓蒙だけでなく、実際に現場で実践していく機会はずいぶん増えてきた。早くから日本にはスウェーデン式が必要だと考えていた、浦安を中心に住関連事業を展開する「ダイニチ」の六井元一社長との出会いだ。

一緒に何度かスウェーデンでの現場を視察する中で、六井社長は介護施設共通の課題である認知症ケアについて、ここまで出来るんだという実感をつかんだ。

認知症になっても日常生活の中に楽しみを持つことは不可能ではない。グスタフさんの理念に共鳴し、希望を持ってダイニチの介護サービス部門として「舞浜倶楽部」が設立され、わずか半年でほぼ満室となり、理念と方法論の正しさが日本人にも受け入れられたという確かな手



応えがあった。

自治体との良好な関係づくりやスタッフとの理念の共有など、本人の言葉を借りれば「ハンパじゃない」課題をたくさん抱えながら、剣道で習得した挑戦心と持ち前の明るさで、着実にスウェーデン式を日本に定着させつつあるようだ。

QOLを大切にしたい スウェーデン式ケア

グスタフさんが舞浜倶楽部で展開するスウェーデン式ケアの原点は、スウェーデンの王立財団法人が運営するシルビアホームのケア理念にある。

「健常なときだけでなく、複雑な状況になってもそのひとの人格の尊厳を守ること。これがシルビアホームの大きなコンセプトです。認知症になっても、そのひとのQOL(クオリティ・オブ・ライフ=生活の質)を守る。舞浜倶楽部ではそのために様々な手法を取り入れています。」

その代表的なものに「タクティール® ケア」と「ブンネ法 音楽ケア」がある。

「タクティール® ケア」は、手足や背中を柔らかく包み込むようになでる、スウェーデン生まれの緩和ケアの手法。日本でも「手当」という言葉があるように、肌と肌のふれあいによるコミュニケーションによって、不安や痛みを緩和するケアで、日本人にもなじみやすい具体的な方法だ。

「ブンネ法 音楽ケア」は、スウェーデンの多くのケア現場で採用されているもので、誰でも簡単に操作出来るように工

夫された「ブンネ楽器」を使って、入居者・利用者とスタッフが一緒に音楽を演奏することで、人間の能力や機能の活用、保持、促進をうながすもの。



レバーを動かすだけで誰にでも弾けるよう工夫された「ブンネ楽器」

「話すことと歌うことは脳の別の機能なんです。話すことが出来なくなったひとでもこのように音楽を楽しみながらやがて歌が歌えるようになることもあるんです。スタッフが驚き感動している様子がわかるでしょう。」

グスタフさんはビデオを見せながらブンネ法の効果を語ってくれた。有名なジャズシンガーが音楽仲間を連れてきて、入居者と一緒に音楽を楽しんだり、地域の人を招いてブンネの演奏会を開くこともあるという。

「認知症のひとが近隣の人たちの前で楽器の演奏を披露するなんて発想は、これまでなかったことですよ。ブンネ法ならそれが実現できるんです。」

その他、一人ひとりの生活パターンを記録することで個人のペースにあわせた排泄ケアを実施し、自信と快適な暮らしをもたらす仕組みを取り入れたり、入居者毎のライフストーリーを把握したスタッフがシフトを組んで対応するコンタ

クトパーソン(担当者)制を導入する、また一人ひとりに適した優れた福祉用具を選択するなど、個人の意志を尊重し、尊厳を守り、徹底した「パーソナルケア」の概念を貫いている。

日本に適したケアのかたち

「見学会で、なぜスウェーデン式なのかという質問をときどき受けます。ここはスウェーデンじゃないじゃん、ってね。確かに外観もラウンジも美容室もヨーロッパ風です。でも、居室エリアは杉の床や日本の古代色の壁紙、ヒノキ風呂など、日本風なのです。」

日本はたくさん西洋の文化を取り入れ、上手に両方を調和させている国です。だから入居者の方も違和感なく暮らしていらっしゃる。日本の生活文化のいいところと、スウェーデンの福祉に対する考え方や手法の優れているところを取り入れて、自分が最期まで自分らしくいられる生活の場を提供したいと考えているんです。」

介護付有料老人ホームと在宅の認知症デイサービス、小規模多機能サービスを一体化しているのも、地域とのつながりを大切に、在宅から施設介護、そして看取りまで、自分の望む場所で暮らし続けたいという思いに応えるためだ。

こうした理念をさらに進めるため、舞浜倶楽部ではスウェーデン福祉を学ぶ研修機関を持ち、さらに敷地内に病院を併設する準備もはじまっているのだ。

浦安からはじまるスウェーデン方式のケアが日本の介護に新風を吹き込もうとしている。剣道で鍛えた挑戦精神を発揮するグスタフさんの今後の活躍に期待したい。

(インタビュー：ハートページ 編集長 荒木左地男)

Profile **グスタフ・ストランデルさん**

- 1974年 スウェーデン生まれ
- 1992年 交換留学生として 早稲田大学高等学院で学ぶ。
- 1997年 北海道東海大学に再び 交換留学生として来日。
- 2000年 ストックホルム大学卒業
- 2003年 スウェーデン福祉研究所 所長就任(2008年まで同職に従事)
- 2005年 日本スウェーデン福祉研究所 取締役就任
- 同ファウンディング・メンバー
- 2008年 スウェーデン・クオリティケア AB顧問就任。アジアにおける活動の立ち上げに従事
- 2009年 株式会社舞浜倶楽部 総支配人就任



著書：
「私たちの認知症」
2009年4月出版
(幻冬舎)

MAIHAMA CLUB **舞浜倶楽部 新浦安フォーラム**
JR京葉線 新浦安駅 徒歩15分/JR京葉線 新浦安駅 タクシー5分

内覧会の予約・資料請求
☎0120-621-406 受付時間 10時~18時(年中無休)
FAX 047-352-7302



<http://www.maihamaclub.com>